研究課題
「グローバルキャリア教育」を基軸にしたアクティブラ－ニングの開発
－国際交流インストラクター事業を中心に－

研究期間　　平成２７年度～平成２８年度

研究組織

氏　　名	所属･職名(専門)	役　割　分　担
研究代表者		
釜田　聡	学校教育研究科･教授	研究代表者,研究総括と研究推進
	(総合学習,国際理解教育)	
研究分担者		
田島　弘司	学校教育研究科･准教授(総合)	研究推進,日本語教育を基軸としたカリキュラムの開発
角谷　詩織	学校教育研究科･准教授(総合)	研究推進,
坂田　和也	上越教育大学附属中学校教諭	研究推進,附属中学校での授業実践
田口　秀行	上越教育大学附属中学校教諭	研究推進,附属中学校での授業実践
研究協力者		
吉田　祥子	上越教育大学大学院生(総合)	中国･台湾関係資料収集,中国語翻訳
鹿島　美紀	上越教育大学大学院生(総合)	グローバルキャリア教育に関する資料収集
羽廣　裕希	上越教育大学大学院生(社会,総合)	生き抜く力と社会科教育実践に関する資料収集
野村　一誠	上越教育大学大学院生(社会,総合)	生き抜く力と社会科教育実践に関する資料収集
増田　絵理子	上越教育大学大学院生(社会,総合)	生き抜く力と社会科教育実践に関する資料収集
王　代ロン	上越教育大学大学院生(総合)	内モンゴル関連資料収集,翻訳担当
楊　震	上越教育大学大学院生(総合)	中国関連資料収集,翻訳担当
井関　貴博	上越教育大学大学院生(総合)	ワークショップの開発と実践
中川　真菜美	上越教育大学大学院生(総合)	ワークショップの開発と実践
前原　卓志	上越教育大学大学院生(総合)	ワークショップの開発と実践
喬　宏成	上越教育大学大学院生(グローバル)	ワークショップの開発と実践
周　勝男	上越教育大学大学院生(グローバル)	ワークショップの開発と実践
髙橋　宏輔	上越教育大学大学院生(グローバル)	ワークショップの開発と実践
牧　祐樹	上越教育大学大学院生(グローバル)	ワークショップの開発と実践
計18名		

研究成果報告

執筆者　・上越教育大学大学院学校教育研究科
グローバル・ＩＣＴ・学習研究コース　教授　釜田　聡（研究代表者）
・大学院学校教育研究科（修士課程）学校教育専攻
グローバル・ＩＣＴ・学習研究コース　　髙橋宏輔（研究協力者）

Ⅰ 研究の構想

１　研究目的

本研究の目的は，次の２点である。

一つは，平成28年度からの大学改革に伴う新コース（グローバル・ICT・学習研究）の新設科目（国際理解・地域教育デザイン）の試行のためである。

本新設科目は，新潟県国際交流協会と連携し，「国際交流インストラクター」の素養を身に付け，グローバルマインドをもつ教員の養成を目指すものである。本研究を通じて，新設科目の授業運営を円滑にするための知見を抽出し，かつ新設コースの中核を担う授業科目に磨き上げることを目指す。

もう一つは，「グローバルキャリア教育」を基軸としたアクティブラーニングの開発を大学教員と大学院生，上越地域の教員で行い，地域教育実践の質的向上に寄与することである。

平成25年6月14日，第2期の教育振興基本計画（以下，「計画」）が閣議決定された。「計画」は我が国の危機的な状況を回避するための社会の方向性として「自立・協働・創造モデルとしての生涯学習社会の構築」を掲げた。また，この実現に向けた教育の方向性として，「1.社会を生き抜く力の養成，2.未来への飛躍を実現する人材の養成，3.学びのセーフティネットの構築，4.絆（きずな）づくりと活力あるコミュニティの形成の４つの基本的方向性を示した。

これらを受け，新潟県では，平成26年4月に新潟県教育振興基本計画を策定した。ここで注目されるのは，基本方針のキャリア教育の推進である。従前のキャリア教育観を一変させている。すなわち，従前の「郷土愛を軸としたキャリア教育の推進」を掲げてはいるが，それと共に「グローバル化に対応した教育の推進」「ICT教育の推進」「持続可能な社会を構築する教育の推進」の柱が明示された。

従前のキャリア教育との違いを明確にするため，ここでは「グローバルキャリア教育」と呼ぶ。また，新時代の教育の柱として，アクティブラーニングが注目されている（本研究では，「児童・生徒の主体的・能動的，参加型の学習活動の総称」とする）。一方で，アクティブラーニングの内実を明らかにし具体的な教育実践を生成・実践・評価をすることが喫緊の課題となっている。

そこで，本研究では，上記の研究目的を設定し，実践的・開発的研究に着手することとした。

２　研究の特色

本研究の学術的な特色は次の２点である。

(1)新授業科目の試行

新コース（グローバル・ICT・学習研究）の新設科目（国際理解・地域教育デザイン）の試行を行うことである。新設科目（国際理解・地域教育デザイン）では「国際交流インストラクター事業」の参画を通じて，グローバルマインドをもつ教員の養成を目指している。本研究は，新設科目の授業運営を円滑にし，新設コースの中核を担う授業科目として磨き上げるところに特色がある。

(2)グローバルキャリア教育を基軸にしたアクティブラーニング」のプログラムの開発

本研究では「グローバルキャリア教育を基軸にしたアクティブラーニング」の内実を理論的・実証的・実践的に検討し，実践上の課題として抽出・可視化することで，「グローバルキャリア教育を基軸にしたアクティブラーニング」のプログラムをいち早く開発する。「計画」が指摘する危機的な状況は，まさに持続発展教育とグローバル化に対応する国際理解教育のさらなる充実が求められる。本研究は，そうした喫緊の教育課題に正対し取り組むところにその特色がある。

３　研究の意義

本研究の意義は次の２点である。

(1)新授業科目の試行による成果と課題の抽出

新コース（グローバル・ICT・学習研究）の新設科目（国際理解・地域教育デザイン）の試行を行うことで，グローバルマインドをもつ教員の養成を目指すにふさわしい実践上の知見を導出することができる。このことは，平成28年度に開設される新設科目の授業運営を円滑に進め，新設コースの中核を担うにふさわしい授業科目として位置付くことにつながる。

(2)新授業科目の試行によるワークショップの開発

「グローバルキャリア教育を基軸にしたアクティブラーニング」の内実を検討し具体的なプログラムと教材をいち早く具現化し教育現場に提案することである。

大学・附属・地域連携型のプログラムを開発することである。研究組織として，大学教員と大学院生，附属中学校の教員，上越地域の教員（元附属中学校教員）のネットワークを有効に活用し，大学・上越地域連携型のカリキュラム・教材を開発する。

４　期待される研究成果

「グローバルキャリア教育を基軸にしたアクティブラーニング」の内実が明らかになり，地域教育実践の質的充実に貢献をすることができる。この研究成果は，新コース（グローバル・ICT・学習研究）の新設科目（国際理解・地域教育デザイン）の充実に寄与し，新コースの充実と本学の発展につながると確信する。

以下，研究の概要と研究の結果，今後の展望について報告する。

Ⅱ 研究の概要

１　国際交流インストラクター事業とは

上越教育大学HP（http://www.nuis.ac.jp/iuip/）には，国際交流インストラクター事業について，次のように記載されている。

> 平成24年度から，国際交流インストラクター養成事業に参加しています。
> この事業は財団法人新潟県国際交流協会が主催し，大学生の国際交流インストラクターを県内小中学校及び高等学校等へ派遣し，国際理解を深めるための講座（ワークショップ形式）を実施します。この事業をとおして若者の国際理解を深め，その知識を社会へ還元する目的で行っており，大学生リーダー養成事業の一つです。
> 本学のほか，新潟国際情報大学，敬和学園大学，新潟県立大学が参加しています。

国際交流インストラクター事業の源流は，新潟国際情報大学の取り組みに遡ることができる。新潟国際情報大学「国際交流インストラクター事業」(http://www.nuis.ac.jp/iuip/)によると，次のように記載されている。

> 国際交流インストラクター事業は，文部科学省が行う「平成19年度　現代GP（現代的教育ニーズ取組支援プログラム)」に新潟国際情報大学（NUIS）が申請した「地域の国際化を推進する参加型実践教育」が選定されたことが契機となった。これは2005年からはじめた新潟国際情報大学と新潟県国際交流協会などの協働企画「国際交流インストラクター」の実績をいかし，学生をインストラクターとして育成し，新潟県内小中学校・高校に派遣するもので，地域社会の国際交流意識，地域活性化をうながす意欲的な学生教育プログラムとして高く評価された。それらを受け，これまでのNUIS国際交流インストラクター事業は，2007年10月から3年間，NUIS現代GP国際交流インストラクター事業として新たに生まれ変わった。2010年度より現代GPは終了したが，学生主体の希望の教育は新潟県国際交流協会からの委託事業として現在も継続・実践中。
>
> （新潟国際情報大学「国際交流インストラクター事業」HP(http://www.nuis.ac.jp/iuip/)の記載内容を筆者が一部加筆修正）

2　上越教育大学の取り組み

(1)平成27年度　ワークショップの概要

ワークショップの様子（上越教育大学HPより）

①NO more 食べ残し

日本の食べ残し事情を認識することを通じて，世界の食糧事情や飢餓問題のような世界の食の「現実」について興味・関心，問題意識をはぐくみます。世界で生産されている食糧は数量的には足りているにも関わらず，
飢餓問題が深刻化していることを子どもたちに理解してもらい，自分たちがどれだけ恵まれた環境にいるかということに気づいてもらいます。
そして，どうして飢餓問題が起きるのかを予想したり，自分たちはこれから何をすべきなのかを考えたりする場を設定します。

②水から見える世界

私たちは誰でも，生きていくためには水は絶対に欠かせない物です。また，日本のみならず世界で水不足，水質汚染などの水に関する問題が起きています。しかし，最も身近な存在であるにも関わらず水のことについて私たちはほとんど知りません。このような問題を解決するためには，様々な問題に関心を持ち，問題を理解し，解決のために自分が何をできるかを考える態度を育てることが重要です。そのため，本活動では，身の周りで水がどのように，どのぐらい使われているかを知ることで，日本及び世界における水の現状に関心を持ち普段の水の使い方について見つめ直すきっかけになることを期待します。

③私たちの生活と地球温暖化

大量のモノにあふれ，便利になっている私たちの生活。そのような生活の一方で，進んでいく地球温暖化。私たちの生活と地球温暖化という大きな問題はどのようにつながっているのでしょうか。このワークショップでは，地球温暖化から起こる様々な問題を通して，地球温暖化と私たちの生活とのつながりを見つけ，一見「豊か」で「便利」に見える暮らしの裏に潜む問題について考え，持続可能な社会を形成していくための行動につなげていきたいと考えています。

④異文化理解の学習で各国のいいぶんかを知ろう！ー和食を食べるアメリカ人，お風呂に入るドイツ人ー

身近な生活習慣から日本と海外の違いを見つけ理解し合います。近年「社会のグローバル化」が急速に進んでおり，かつてはバラバラだった文化も他国の文化を取り入れ合うこ

とにより世界の文化が身近になってきています。生徒にはどの文化が良い，悪いではなくあらゆる文化を柔軟に受け入れる視点を養ってもらいたいです。そこで，文化の共通点や違いを学ぶ学習を通して海外に興味を持ってもらい，少しでも他国の人と関わるための積極性と柔軟性を身につけてもらいたいと考えます。

(2) 平成28年度　ワークショップの概要

①あなたの眼鏡はどんな眼鏡

近年，グローバル化が急速に進み，世界の様々な文化や人が゛国を超えて往来し，私たち日本との関わりが゛増してきている。習慣や価値観，背景が゛異なる人たちと共に生きていくために，違いを良い・悪いで゛安易に判断するので゛はなく，違いに興味をもち，背景に想いを馳せ，柔軟に受け入れる姿勢が重要だと考える。本ワークショップ゜を通して，自分の先入観と向き合いなが゛ら，自己(日本)と他者(外国)の双方を尊重し合える関係性について考えるきかけになってもらえたら嬉しい。

参加者には，人や国などによって様々な違いはあるけれど，まずはその違いに興味をもち，その違いが生まれる背景を理解することの大切さを考える契機となることを目的とする。最終的には，違いを認め合うだけではなく，違いを超えて，共により良く生きていくために何ができるかを考え，日常生活での意識や行動に繋げていくことを目的とする。

②水から見える世界　－身の周りのものを通して－

私たちは誰でも，生きていくためには水は絶対に欠かせない物である。また，日本のみならず世界で水不足，水質汚染などの水に関する問題が起きている。しかし，最も身近な存在であるにも関わらず水のことについて私たちはほとんど知らない。このような問題を解決するためには，様々な問題に関心を持ち，問題を理解し，解決のために自分が何をできるかを考える態度を育てることが重要である。そのため，本活動では，身の周りで水がどのように，どのぐらい使われているかを知ることで，日本及び世界における水の現状に関心を持ち普段の水の使い方について見つめ直すきっかけになることを期待する。

身の周りでの水の使われ方，水が使われている量を知ることを通じて，水の現状について関心を持ち，普段の自分自身の水の使い方について見つめ直すきっかけを提供する。そして今後自分自身で何が出来るかを考え，行動しようとする態度を育てることを目的とする。

③あたりまえ（１）

日本は，食べ残しが多い国であり，食べ物があるのは，あたりまえであると感じている人が多い。世界で生産されている食糧は数量的には足りているにも関わらず，飢餓問題が深刻化している。そこで，「世界の不平等」について子どもたちに理解してもらい，自分たちがどれだけ恵まれた環境にいるかということに気づいてもらう。そして，飢餓問題が起きる背景に「戦争」が関わっていることに気づかせ，「平和」の大切さについて再認識させたい。また，自分たちはこれから何をすべきなのかを考えたりする場を設定する。加えて，本ワークショップは低学年でも参加できるように，体を動かす活動や，クイズを多

く取り入れている。

世界の食糧事情や飢餓について知る活動を通して，飢餓問題の現状を知る。また，日本の食べ残しの問題に触れることで，世界と日本，自分と他者を比較し，自分と世界の課題とのつながり（関係性）について考えさせ，「平和」の裏には，世界の不平等さがあることに気づくことを目的とする。

④あたりまえ（２）

戦争は現在，世界のいたるところで起こっている。その証拠に，紛争やテロなどを扱ったニュースやテレビ番組を頻繁に目にする。これほどまでに戦争に注目が集まるのは，戦争が人の命を奪う行為であり，環境破壊や飢餓等の弊害を伴う行為だからである。日本も戦争を経験しており，その脅威を十分に理解しているため，社会等の科目を通して，戦争についての教育を行っている。しかし，それらの教育は紙面にとどまりがちであり，また，現在の平和な日本から戦争の脅威というものを感じることは非常に困難であると考える。戦争は世界で現在も起こっている人の命をめぐる問題であるのに対して，その理解は知識にとどまってしまっているのである。そのため，本活動では戦争が起こる原因や戦争の構図を，子どもにとって身近な漫画の喧嘩の場面から理解させる。また，戦争による被害や軍事費等などの戦争に関わる情報をクイズ形式で出題する。以上の活動を通して，戦争を身近な出来事として捉えさせ，戦争について考えるきっかけとしたい。

戦争が起こる原因や戦争の構図，戦争による被害や軍事費等を知ることを通して，戦争を身近な出来事として捉え，関心を持つきっかけを提供する。

⑤ごみってホントにいらないもの？

このワークショップでは，日常生活をおくる上で，必ず出る「ごみ」に焦点を当て，環境問題を考えることを目的とします。「ごみ」は果たして「いらないもの」なのか。世界中のごみ事情を紹介しながら，生徒の皆さんが住んでいる地域のごみ事情と比較をし，「ごみ」について考えます。日本でもいらなくなった「ごみ」は宝物だと考える企業があります。そのような取り組みも紹介し，「ごみ」に対する意識向上を目的とします。

新潟のごみの事情はどのようになっているか。分別の仕方などを体験しながら，本当にこれらはごみであるのかを考え，日本でのごみ事情と，世界のごみ事情を考えます。

身近な問題として捉えづらいごみとそこから生じる環境問題について理解を深め，ごみの認識を改めるきっかけ与えたい。普段出しているごみは，果たして本当にいらなくなったものなのか，またはほかの世界では必要とされているのではないだろうかという幅広い視野を見ることによって，日本のリサイクル事情や，経済的な視点などを培い，環境問題に大きな意識をもってもらうことを目的とする。

また，空き缶や新聞紙や段ボールがリサイクルすることでお金になり，世界では大人も子どもも一生懸命集めている地域がある。それは，生活のためで，生きるためにごみを集めているという現実であり，そこから南半球と北半球の国々との経済格差を知ってもらいたい。そういった地域の人から見れば日本のごみ捨て場は，おそらく宝の山であるし，しかし，我々はそれをごみとして認識しており，この感覚の誤差も気付いてほしい。

⑥地球温暖化っていいこと？よくないこと？

現在，世界中で地球温暖化が問題となっています。日本も地球温暖化を防ぐことが大きな課題となっており，現在，国が一生懸命取り組んでいます。このワークショップでは，地球温暖化になれば，日常生活などにどのような弊害が生じるのか。また良いことはないのかなど，多角的な視野で地球環境問題を考え，子どもたちが大きくなったときに，より深刻に議論されていくだろう地球温暖化を身近に感じてもらおうと考えています。

地球温暖化が進行すれば，地球ではどのようなことがおこるのか。または日本ではどのような影響があり，新潟県ではどのような影響が出るのか。ミクロ的とマクロ的視点をおいて考えていき，地球温暖化のことを将来，より児童たちが興味を持てるような考えを持つ趣旨である。

今回のワークショップにおいて，地球温暖化が温室効果ガスの影響が大きいと言われているが，児童生徒たちには，温室効果ガスと言っても理解しがたいと思われる。そこで，身近なことや意外なものまでが影響となっていることを紹介し，地球温暖化を考えてもらうのを目的とする。このまま地球温暖化の原因を多様・多角的な視点で見ることで，我々が住む日常生活や経済などがとても密接に関係していることが分かり，今後，児童生徒が，成人したとき，どのような分野においても，地球温暖化は密接な関係があることをより知り，より高い意識を持てる視野を持つことの一助となることを，今回のワークショップを通じて実現をしたい。

⑦私たちの共通って世界共通？

本ワークショップでは，子どもたちが普段何気なく通っている学校に焦点を当てる。そして，日本と海外の教育事情を学ぶことを通して，教育を受けることの意義や重要性について考えてもらいたいと思っている。そのため，以下のような学習課程を通して本ワークショップを進めていく。導入部では，子ども達自身が持つ学校に対するイメージを問う。また，日本と同じ先進国の学校を紹介し，海外の教育事情を紹介する。次に展開部では2つの内容を行うことを予定している。1つは，発展途上国における教育の現状である。ここでは，カンボジアの学校を例に，自分たちが受けている学校の様子と比較を行い，もう1つは，世界各国の文字を使った体験活動である。日本語を含む，計5ヶ国の言語を用いたゲームを数グループに分けて行う。この活動を通して，文字が読めることのありがたさを実感させる。最後に，終末部では，ワークショップを通して，子ども達が感じた事や考えたことについて意見をまとめクラス内で共有を行う。

世界中には，戦争や内戦などの社会的要因，また貧困などの経済事情によって，学校に行けず，字も十分に読むことができない子供たちがたくさんいる。現在日本では，学校は不自由なく当たり前のように通うことができている。学校には，安全に通学ができ，教室があり，教科書があり，先生たちがいる。しかし，そのような環境は当たり前のものではなく，この上なく幸せなことである。このようなことを，本ワークショップで感じ，かつ，世界中で十分に教育を受けることができていない子どもたちがどのような生活を送っているかを，疑似的体験を通じて体験する。そして，その体験から世界中の国が，同じ環境下で過ごしているわけではないということを知り，教育を受ける事ができるありがたさに気付くこと目的とする。

3　大学院授業科目「国際理解・地域教育デザイン」の概要

(1)「国際理解・地域教育デザイン」シラバスの構築

平成27年度の試行の成果と課題を踏まえて，平成28年度グローバル・ICT・学習研究コースの新授業科目（共通科目）の一つとして，「国際理解・地域教育デザイン」を立ち上げた。以下は，平成28年度のシラバスである。

科目名　国際理解・地域教育デザイン＜H28以後入学者用＞
担当教員　釜田聡　田島弘司　角谷詩織
対象学年　1年
講義室　人104　開講学期　前期
曜日・時限　金３　単位区分　選択
授業形態　講義・演習　単位数 2
授業の到達目標・テーマ
グローバル化の進展により学校や地域社会に顕在化してきた教育的な諸課題を対象として，国際理解教育のカリキュラムと教材の開発方法，同学習の科学的な分析と評価に関する研究方法を学び，フィールドワークや実践・演習（国際交流インストラクターの準備）を通じて実践的指導力と教育研究の基礎を修得する。なお，本授業を履修することで，「国際交流インストラクター」としての認証（新潟県国際交流協会）を受け，国際交流インストラクター事業に参加する権利を得ることができる。
授業の概要　主な授業概要は次の三つの学修で構成される。
・多文化社会，未来への選択，子どもと地域及び世界との関係を結ぶ社会系カリキュラムと教材開発，国際交流インストラクター事業との連携
・異文化コミュニケーションの実際（留学生との交流と対話），日本語教育の現状と課題，ことばと国際理解
・子どもの発達とメディア，国際理解・地域教育に関する科学的な分析・評価方法
履修条件　グループワークが多くなるため，積極的な参加姿勢がのぞまれる。
注意事項　本授業を履修し，単位を修得することで，新潟県国際交流協会から「国際交流インストラクター」としての認定を受け，国際交流インストラクター事業に参加できる。「国際交流インストラクター」とは，新潟県内（主に上越地域）の小・中・高校に出向き，国際理解や環境教育，異文化理解に関するワークショップを行う学生である。国際交流インストラクター事業は，資格を得た学生を地域の小・中・高校に派遣しワークショップを行う事業である。前期に本授業科目を履修し単位を取得した場合は，可能な限り，後期に，国際交流インストラクター事業に参加し，依頼があった小・中・高校でワークショップを行うことがのぞまれる。回数は，年に１～２回程度の予定である。詳細は，ガイダンスで説明する。
授業時間外の課題等　ワークショップの開発や基礎の習得等で，時間外の課題を提示したり，促したりする。

授業計画・内容（授業回数毎）

第１回：ガイダンス　これからの見通しと国際交流インストラクターについて
（担当：全教員）

第２回：国際理解教育の現状と課題①（世界の子どもたちの現状）（担当：釜田）

第３回：国際理解教育の現状と課題②（開発教育を中心に）（担当：釜田）

第４回：ことばと国際理解教育について（担当：田島）

第５回：異文化コミュニケーションについて（担当：田島）

第６回：子どもの発達とメディアについて（担当：角谷）

第７回：国際理解・地域教育に関する科学的な分析・評価方法（担当：角谷）

第８回：ワークショップ開発の基礎研究（ワークショップの概要）（担当：全教員）

第９回：ワークショップ開発の基礎研究（開発教育から学ぶ）（担当：全教員）

第10回：ワークショップ開発の実践（問題意識の整理とグループ編成）（担当：全教員）

第11回：ワークショップ開発の実践（グループごとの打合せ）（担当：全教員）

第12回：ワークショップの開発演習（グループでの実演）（担当：全教員）

第13回：ワークショップの開発演習（ワークショップの公開）（担当：全教員）

第14回：ワークショップの分析と評価（担当：全教員）

第15回：ワークショップの省察とレポート作成（担当：全教員）

試験　試験はなし。

成績評価の方法　研究活動への取り組み方，開発したワークショップの質，
各種レポート等を総合的に判断して評価する。

教科書・参考書　研究活動の進捗状況に応じて適宜資料を提示する。

Ⅲ　研究の結果－実践報告を中心に－

1　平成27年度の事業評価

(1)再スタート

2014（平成26）年度の休止の後，2015（平成27）年度に事業を再スタートした。
理由は，次の３点である。

・新しい教育の潮流（教育のグローバル化とアクティブラーニング，教育実践の重視）
・2106（平成28）年度大学院において新コース（グローバル・ICT・学習研究）が設置されること。
・学内の条件整備（国際交流推進センターの設置と担当者の明確化）

(2)平成27年度の事業概要

①実施校

直江津中等教育学校	9月14日(月)	2年生3クラス	122名
柏崎市立北鯖石小学校	9月30日(水)	5.6年生	44名
	10月 7日(水)	5年生	20名

糸魚川市立能生中学校　9月29日(火)　2年生3クラス　78名

②大学側スタッフ

・国際交流推進センター担当　村椿・瀧本

・教員　釜田聡・田島弘司・角谷詩織

・参加学生　大学院M1・9名　学部1年生8名

③募集

学部生：釜田が担当する授業（韓国事情）にてPRする。90名の受講者のうち8名希望する。

大学院生：釜田研究室の学生（M1）に声をかけPRする。9名の希望あり。

④指導・支援体制

・予算面と交通手段の手配等の事務手続きは国際交流推進センターが担当した。

・学生の指導・支援は教員が行った。当日の引率は教員が行った（日程調整の上)。

・教室は１室確保し，ミーティングや資料等の保管場所とした。

・時間：指導・支援時間，活動時間は特定の時間を確保していない。
学生と指導者と時間を調整して実施した。

(2)平成27年度の成果と課題

実質的に再スタートとなったが，大学院生のグループは現職教員がいたことがあり，ワークショップの企画から実施まで順調に進んだ。充実した活動であったことから，来年度も参加したいという希望をもつ院生がいる。継続性の点から大切にしたい。

一方で，学部生は，熱意はあるものの全員が集まる時間を捻出できず，共通理解を図ることに困難があった（学生の自主的な活動：学びのひろばとの競合)。また，国際理解教育や開発教育などを十分に理解していないことからワークショップの質（内容と方法）も今一歩であった。

2016年度は，大学院の授業科目に「国際理科・地域教育デザイン」という授業が位置付く。そこでは，国際交流インストラクター事業への参画を目指した授業を行う予定である。学部の指導・運営体制については，再検討を行う予定である。

新年度は，ワークショップのさらなる充実と安定した運営体制の構築を目指したい。

2　平成28年度の事業評価

(1)再スタート2年目

2014（平成26）年度の休止の後，2015（平成27）年度に事業を再スタートし，平成28年度は再開後2年目を迎える。

(2)平成28年度の事業概要

①実施校

9/16(金)　糸魚川市立木浦小学校

3・4年生対象　テーマ：世界の現実「ごみって本当にいらないもの？」

5・6年生対象　テーマ：世界の現実「私たちの普通って世界共通？」

9/26(月)　上越市立牧小学校

9/29(木)　新潟市立鎧郷小学校

4年生対象　テーマ：世界の現実「水から見える世界」

9/30(金)　柏崎市立二田小学校

5年生対象　テーマ：世界の不平等「あたりまえ」

10/30(日)　大学祭の開催に合わせて大学内で実施

大学祭参加の児童・生徒が対象

テーマ：異文化理解「あなたのメガネはどんな眼鏡？」

2/6（月）　柏崎市立北鯖石小学校

テーマ：「あなたのメガネはどんな眼鏡？」

②大学スタッフ

・国際交流推進センター担当　藍木　瀧本

・教員 釜田聡　田島弘司　角谷詩織　原瑞穂

・参加学生 大学院生15名（昨年9名）　学部1年生1名（昨年8名）　計16名

③募集方法

学部生：釜田が担当する授業（韓国事情）にてPRする。90名の受講者のうち1名希望。

大学院生：「国際理解・地域教育デザイン」の授業履修者8名＋学内公募7名

④指導・支援体制

・予算面と交通手段の手配等の事務手続きは国際交流推進センターが担当した。

・学生の指導・支援は教員が行った。当日の引率は教員が行った（日程調整の上)。

・教室は１室確保し，ミーティングや資料等の保管場所とした。

・時間：指導・支援時間

大学院「国際理解・地域教育デザイン」と研究室単位のゼミの時間

公募学生　活動時間は特定の時間を確保していない。学生と指導者と時間を調整した。

(3) 平成28年度の成果と課題

①成果

再スタート2年目。昨年度の経験者と現職教員がいたグループは，ワ ークショップの企画から実施まで順調に進み，充実した活動となった。

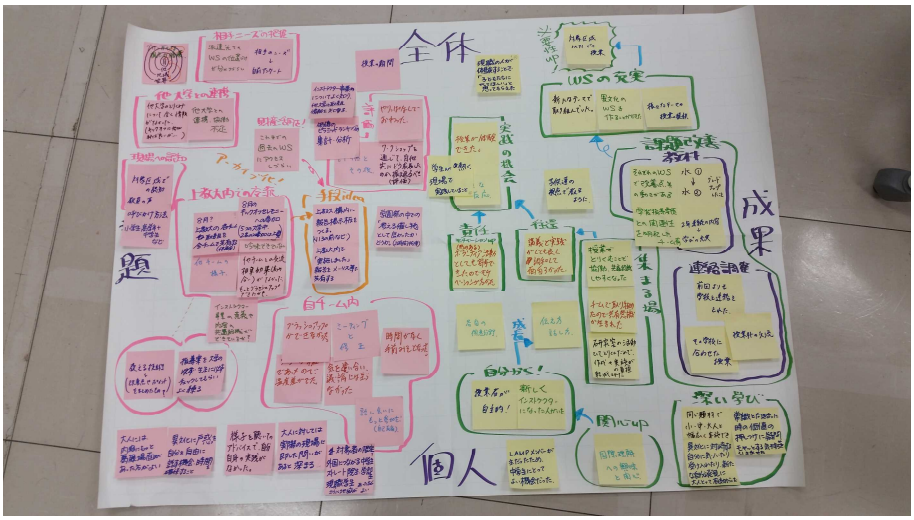
②課題

①以外の学生は，ワークショップの初歩から習得する必要があった。大学院生であっても，教育現場での実践経験が少ない学生が数ヶ月でワークショップを企画・立案し，実践するまでには課題は少なくない。また，学部生は1名のみの参加であった。募集方法や指導体制については今後の課題としたい。

また，新潟で開催される各種研修会や情報交換会等については，ほとんど参加できず，心苦しい限りである。

新年度は，ワークショップのさらなる充実と安定した運営体制の構築を目指したい。

2017. 3. 1　ワークショップの振り返り



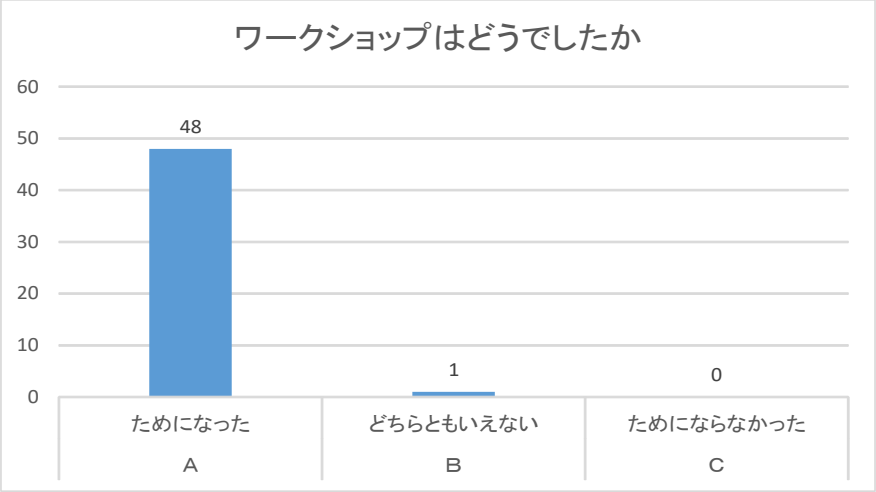
2017. 3. 1　ワークショップの振り返りの成果

3　児童・生徒からの評価

国際交流インストラクター事業では，新潟県国際交流協会作成の共通アンケートをワークショップ実施校の児童・生徒に依頼し，集計・検討をしている。本プロジェクト研究でも，この共通アンケートを評価情報の一部として活用する。

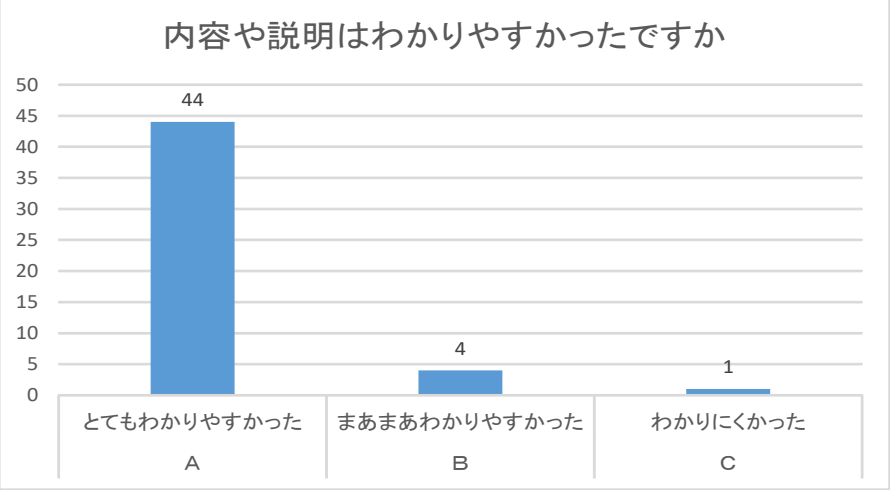
主な質問項目は，ワークショップに対する感想や学生の説明，世界への関心等である。以下，Ａ小学校4年生とＢ小学校4年生，計49名のアンケートの集計結果を示す。なお，該当のワークショップは「水から見える世界」である。

表1　ワークショップはどうでしたか



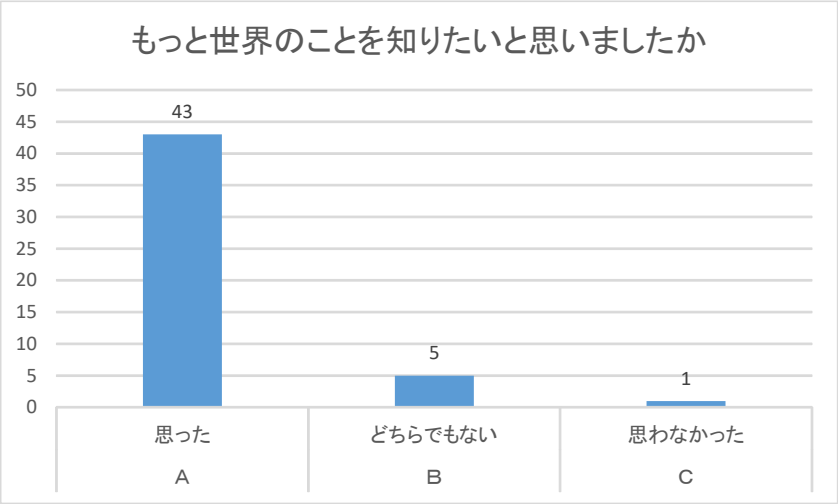
（アンケート用紙をもとに筆者作成）

表2　内容や説明は分かりやすかったですか



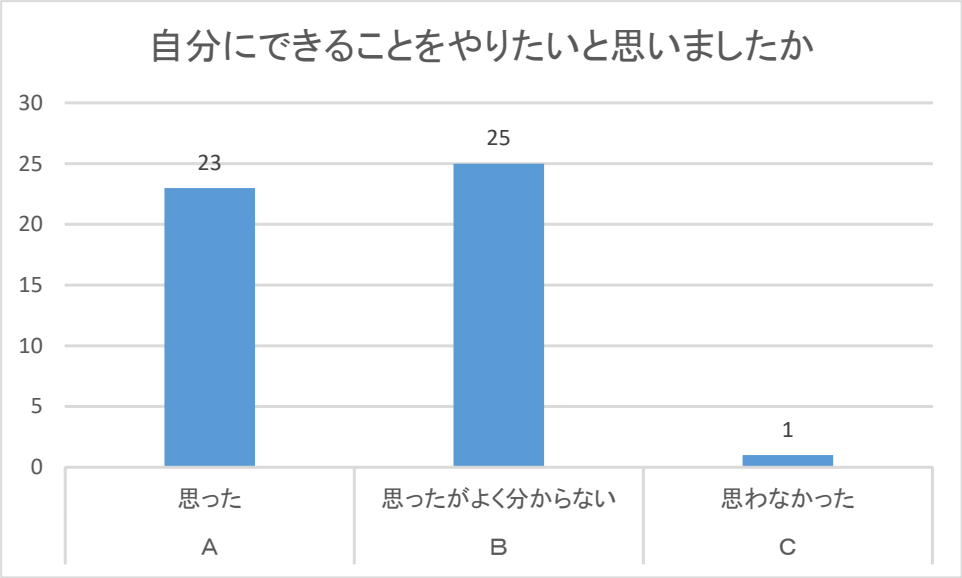
（アンケート用紙をもとに筆者作成）

表3　もっと世界のことを知りたいと思いましたか



（アンケート用紙をもとに筆者作成）

表4　今回のワークショップを受けて，自分でできることをやってみたいと思いましたか。



（アンケート用紙をもとに筆者作成）

子どもたちのアンケート結果から，読みとることができることは次のとおりである。

ワークショップに対する素朴な感想や内容・方法の分かりやすさについては，極めて高い「肯定的な評価」を得ている。また，世界に対する興味関心も高まったことが確認できる。一方で，「自分でできることをやりたいと思いましたか」という設問に対しては，「思ったがやり方がよく分からない」と回答した子どもが多かった。これは，ワークショップの内容と時間に関する一つの限界であると考える。

ワークショップの内容と方法を工夫することで，世界のことや環境に対する興味関心，問題意識ははぐくむことには一定の成果を挙げることができたといえる。一方で，子どもたちが主体的に世の中にアクションを起こすには，今回のワークショップの内容・方法面では十分ではなかった部分があったといえる。今後のワークショップの改善点といえよう。

4　平成29年度の取り組み

(1) ワークショップの参加者・指導体制

①ワークショップ参加者

今年度学生参加者は，国際理解・地域教育デザイン履修者20名と原研究室・小高研究室の学生，その他を加えて，総勢32名となった。合計8チーム，32名がインストラクターとしてエントリーした。

②学内指導・支援体制

学内担当	氏　名	所属等
専任アドバイザー	釜田　聡	グローバル・ICT・学習研究 国際交流推進センター長
	田島　弘司	グローバル・ICT・学習研究
	角谷　詩織	グローバル・ICT・学習研究
	原　瑞穂	教育臨床コース・教育経営
	小高　さほみ	生活・健康系教育実践（家庭）
国際交流推進センター	藤谷　元子	国際交流推進センター
国際交流担当	渡辺　一美	研究連携課国際交流チーム（国際交流担当）

(2) ワークショップの概要

①わたしのごはん　あなたのごはん（主な対象：小学校　5.6年生）

日本の伝統的な食文化の特徴を知ったうえで，世界の食事について知る。導入部分では，日本の食文化をクイズ形式で紹介する。その後，グループに分かれて来日者数が多い国の食事について絵本をもとにまとめ，その国の人々になりきって全体でクイズなどを出しながら発表を行う。この活動を通して各国の特徴を知り，発表した国の人が自分たちの身の回りで生活していることを理解し，自分とその人たちとの関わりを考えていく。

②「平和について考えよう」（主な対象：小学5年以上）

戦後７０年以上経った今，日本では戦争経験の語り部が高齢化などで減少している。一方で，世界では核兵器保有国が増加している傾向にある。そこで，「平和をどのように世界に発信するか」を長崎の平和教育の実践を基に行う。歴史的にも異文化の情緒がある長崎であるが，昭和２０年８月９日原子爆弾が投下され一瞬で７万人以上の犠牲を生んだ。新潟も原爆投下が予定されており，模擬原爆も落とされた過去がある。そのような事実を知り，世界の平和について考える。

③無人島に行くことになっちゃった！？

子ども達には，身の回りに何でもあり，何でも手に入る社会で暮らしている。暮らしになくてはならないものは何か，あればいいものは何か気づかずにいる。開発途上国・地域の子どもたちには，人間の暮らしにとって，必要不可欠なものが不足していることが多い。無人島に持っていきたいものを選ぶ活動から，生きていく上での最低限必要なものに気づき，満足に得られない地域や国があることを知る。

④わかり合うための秘密道具って？

グローバル化が進んだ現代，人・モノなどの交流は日々行われている。その一方で，世界的に見れば宗教対立があったり，国内でも日本人と外国人の間で問題が生じたりと，異文化による摩擦は絶えない。しかし，異なるものを，私たちはわかろうとしているのだろうか。″異文化″をわかり合えない理由にしていないだろうか。異文化間の摩擦事例を通して，その背後にある生き方に触れるとともに，教室内の″異文化″も浮き彫りにしながら，″異文化″と共存しながら生きていく自分を開拓したい。

⑤不透明な水問題ーみずから考えようー

日常生に活欠かせない手洗いを通して，その背景にある「世界の水」「衛生問題」の現状を知る。年間810万人の子どもが，５歳の誕生日を迎える前に亡くなっている。その４割が水の不衛生が原因で命を落としている。日本では当たり前に行えていることが，世界では当たり前ではないことに目を向ける。導入部分では水に関するアイスブレイクを通して水への関心を高め，展開部分では実際に子どもたち自身が調べ，まとめ発表する。

⑥The Happiness Ranking -幸せのみつけ方-

幸福に関するランキングは国連や海外の研究機関などから発表されているが，何を基準にするかによってその順位は大きく変動する。
導入部分では，基準が明確である世界人口などのランキングを取り上げる。そこから幸福度にまつわる様々なランキングを示し，基準によって違いが見られる事を示す。
そこには，人々の幸せの捉え方に異なる価値観があることを知り，異文化に対する理解を深めていく。

⑦お米と地球　ーお米の向こうに何が見える？ー

小学校では用水路や稲作体験や食文化等，中学・高校では世界の現状に関する学習に関連付けて，ローカルかつグローバルな視点で地域社会に柔軟に思考をめぐらせます。身近な「お米」からフードロス，そして世界の食を題材として，身のまわりの食べ物と世界とのつながりを「相互依存度神経衰弱」や「地球の食卓」等の子どもたちが主体的に学ぶアクティビティを使って，現状→影響→原因→解決という思考プロセスを協働的に体験しながら，食と自分のあり方を考え直す参加型のプログラムです。

⑧あなたの眼鏡は何色？

近年，世界の様々な文化や人が国を超えて往来し，多様な人々との関わりが増えている。そのようなグローバル化が進む社会の中で，地球上の人たちと共に生きていくためにはどうしたらいいのだろうか。本ワークショップでは，様々なクイズやアクティビティを通して，多様な習慣や価値観，背景を知り，日々の生活の中で多様な人々が持つ背景に思いを馳せ，そのような人々と出会った際に自分がどのように行動するかを考えていきたい。

Ⅳ　今後の展望

1　本プロジェクトのまとめ

本研究プロジェクトの目的は，次の2点であった。

（1）平成28年度からの大学改革に伴う新コース（グローバル・ICT・学習研究）の新設科目（国際理解・地域教育デザイン）の試行のためである。
（2）「グローバルキャリア教育」を基軸としたアクティブラーニングの開発を大学教員と大学院生，附属中学校教員・上越地域の教員で行い，地域教育実践の質的向上に寄与すること。

（1）については，平成28年度の大学院改革により，グローバル・ＩＣＴ・学習研究コースが創設され，カリキュラム上に新授業科目「国際理解・地域教育デザイン」が設定された。履修者数は平成28年度は7名，平成28年度は20名であった。この履修者を中心に，ワークショップを開発し，その成果を国際交流インストラクターとして活動に生かすことができた。つまり，前期授業のなかで，ワークショップを作成・開発し，後期の国際交流インストラクター事業のなかで，その成果を発揮することができた。また，原研究室と小高研究室の学生は，それぞれの研究室でワークショップを開発し，国際交流インストラクターとして活躍している。
（2）については，学生の共同作業の様子やワークショップ進行シートの内容から，次のことが確認できた。
①大学院科目として設定されている関連授業科目の履修を通じて，ワークショップの質的充実につながっている。
②教育実習関連科目で培われた知識・学習技能をワークショップの作成・開発，実践に生かそうとする姿が見られた。
③現職教員とストレートマスターの共同作業によって，ワークショップの質的充実につながり，また双方にとって，教職キャリアを磨く場となった。
④地域の教育実践の質的向上については，毎年開催される国際交流インストラクター事業評価委員会で肯定的な評価を得ている。

2　今後の課題

(1)ワークショップの質的充実
(2)運営・指導体制の充実
(3)教育研究環境の整備

(1)については，ワークショップの開発は児童・生徒の発達段階を踏まえ，学校からの要望を視野に入れつつ行うべきである。つまり，ワークショップは可変的な内容構成と方法を組み込む必要がある。ワークショップの性格上，実施の対象範囲を幅広く設定しつつ，内容構成と方法を臨機応変に再構成できる準備を整えていくことが課題として挙げられる。

(2)については，現在5名の教員と国際交流推進センターが連携して運営・指導体制を構築している。今後，学生や地域のニーズが高まることが予想されることから，持続可能な運営指導体制の構築が喫緊の課題として挙げられる。

(3)について，学生の自主的・主体的，創造的，協働的な学びを促すためにも，教育研究環境の整備が必要である。具体的には，学生が自由に活用できる教材の整備と空間の確保である。今後，本事業の広がりに応じて，臨機応変に対応したい。

Ⅴ　主な引用・参考文献等

各種ＨＰ

上越教育大学ＨＰ国際交流インストラクター事業
http://www.juen.ac.jp/050about/030internat/2012-0806-02.html

新潟国際情報大学ＨＰ国際交流インストラクター事業
https://www.nuis.ac.jp/iuip/jigyou.html

新潟県ＨＰ　新潟県教育振興基本計画
http://www.pref.niigata.lg.jp/kyoikusomu/1356778705979.html

外務省ＨＰ　「世界の学校を見てみよう」
http://www.mofa.go.jp/mofaj/kids/kuni/index.htmlhttp://www.mofa.go.jp/mofaj/kids/kuni/index.html

環境省ＨＰ：地球温暖化対策　http://www.env.go.jp/seisaku/list/ondanka.html

学研ＨＰ：地球温暖化って何
https://kids.gakken.co.jp/kagaku/eco110/answer/a0030.html

国立環境研究所ＨＰ：家庭でできる地球温暖化対策
http://www.cger.nies.go.jp/ja/library/qa/26/26-2/qa_26-2-j.html

書籍・専門書等

開発教育教育協会の教材

日本と世界の水事情「水から広がる学び」アクティビティ20

コーヒーカップの向こう側

フードマイレージーどこからくる？私たちの食べ物

ワークショップ版・世界がもし100人の村だったら　第5版

「子どもとできる創造的な対立解決ー実践ガイド」

新・貿易ゲーム～経済のグローバル化を考える

日本国際理解教育学会『国際理解教育ハンドブック』明石書店，2015年